

人間なめんなよ

第8回 言の葉大賞®

ある夏休みの日の、とあるバス停でのこと。行列の先頭付近に車いすの男性がいた。私と父が並ぶとすぐに、バスがやってきた。

運転手が降りてきて対応に当たったらしいので、私たちは彼らの横をすり抜けてバスに乗った。すると車外から、男性の怒声が聞こえてきた。思わず案の定、と思ってしまった。見た限り運転手との交渉は難航していたようだったからだ。運転手の対応に不満だったのか、男性はついにこんなことを言った。

「世の中こんな人間ばかりや」

車内の人々にも十分に聞き取れる声だった。

バス停に自分の足で立って、入り口の段差を越えバスに乗り込む。それができない煩わしさが、私の中にもうつすらと蘇った。中学二年生の冬、手術をした後しばらく松葉杖を使っていたのだ。慣れない松葉杖に馴染んだ頃にふと、どうやって二足歩行していたのか、きれいに忘れていることに気づいた。歩けることは自由なことだったのだと初めて知った。

それでも当時の私には送り迎えをしてくれる家族や気遣ってくれる学校の先生、地域の人々がいた。傷が完治した今でも、いすを勧めてくれる友人がいるほどである。一方でこの男性はどうか。見たところたった一人だ。さらに「こんな人間ばかり」から、前に何度も同じようなことがあった印象を受ける。

男性は乗せるならスペースを空けると怒鳴っていた。あいにく車内は満員だ。乗客の中から「じじいが…」とぼやく声が聞こえた。彼に味方はいないのか、私も「こんな人間」の一人か、とぼんやり考えていたので、

「人間なめんなよー!」

男性がそう叫んだときにも違和感を感じなかった。

バスが発車した。男性は結局、そのバスに乗らなかった。人間なめんなよ、その言葉だけが乗車して、バスの中を漂っていた。